KOBELCO

春季号

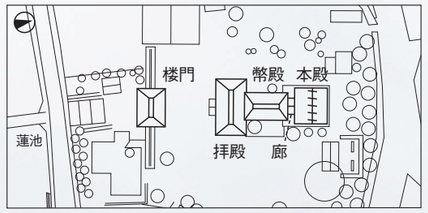
Apr.2017 Vol.236

コベルコ建設機械ニュース

File.39

歴史的建造物誕生の秘密を探る！

青井阿蘇神社



南側から楼門、拝殿、幣殿、廊、本殿と縦一列に並ぶ配置は、人吉球磨地方にも例がない

歴史的建造物誕生の秘密を探る！

File.39

「相良700年」を象徴する人吉球磨の国宝建築

〝心〟が残した青井さん

砂山幹博＝取材・文　田中勝明＝撮影
text by Mikihiro Sunayama / photographs by Katsuaki Tanaka

熊本市から南へ80㎞。宮崎と鹿児島の県境もほど近い九州山地の南端、人吉盆地にその神社はある。江戸の初期、ほぼ同時期に建てられた社殿群が現在まで残り、2008年に青井阿蘇神社の楼門、拝殿、幣殿、廊、本殿の5棟は国宝に指定された。この地方特有の急勾配の茅葺き屋根を継承しつつ、桃山様式の華麗な装飾技法を取り入れた統一感のあるたたずまいは建築としての完成度も高く、近世の人吉球磨地方における社寺建築の手本となったことが評価されたかたちだ。

それにしても山深い人吉（↘）球磨になぜこれほど立派な社殿群が建ち、今日まで残されたのか。今回はその不思議に迫る。

急勾配の茅葺き屋根に禅宗様と桃山文化が融合

球磨川畔の森の中、青々と水を湛える「青井」と呼ばれた池のほとりに青井阿蘇神社が創建されたのは806年のこと。阿蘇山の麓に鎮まる阿蘇神社（熊本県阿蘇市）の祭神12神のうち、3神の分霊が祀られたことに始まる。1198年に鎌倉幕府の命を受けて遠江の国（静岡県）から相良氏がこの地に入ると、青井阿蘇神社は相良氏の氏神として庇護を受けるようになった。現在の社殿は人吉藩主で相良家20代目の相良長毎が、文禄の役（1592～93年）で朝鮮へ出兵する際に戦勝祈願し、その願いが叶ったことで寄進されたもの。1609年から18年にかけて造営された。

屋根の棟が高く勾配が急な茅葺き屋根をいただく寄棟造の楼門は、千木まで含めると高さ約15m。大きく垂木が反り返る鎌倉時代の禅宗様が色濃い建物だ。楼門の先には拝殿と幣殿の茅葺き屋根が連なり、奥に銅板葺きの本殿が構える。

大部分が色あせているが、どの建物も全体に黒漆、細部の木組みに赤漆、建物の内外に配された細密な彫刻は極彩色で彩られ、各所に装飾が施されている。当時の先端、豪華絢爛の代名詞である桃山様式が用いられているのだ。「漆一升、金一升」といわれた時代、高価な漆が建物全体に惜しみなく使われたことから、藩の財政は豊かだったはずと、青井阿蘇神社の宮司、福川義文さんは話す。

「人吉藩は2万2千石と小藩ながら、球磨川流域に開けた稲作には理想的な場所。公称の約2・5倍の石高があり、貴重な米を原料に球磨焼酎を生産できるほどの米どころでした。そして何よりも戦乱や国替えもなく、鎌倉時代から明治維新に至る約700年間、相良氏の統治が続いたので蓄えも相当あったと思われます」

領主の異動がない。実はこのことが、社殿が今日まで残った理由の一つである。

古いものが残る秘密。長期の統治と寛容の心

戦国時代や江戸時代は、下克上やお家断絶、藩主の国替えが頻繁にあった時代。ある一族が同じ地を長期間統治することは珍しく、薩摩の島津氏、対馬の宗氏など数えるほどしか例はない。統治者が変わるということは、家臣やその家族、町人を引き連れてやってきて、町の顔ぶれが一変するということ。神社仏閣にとっては有力な支援者が去り、建物の造営・修造に携わってきた職人の仕事が奪われる危機であった。運が悪ければ、土地の文化や風習ともども従来の建築技術も失われた。しかし、相良氏の統治が長く続いた人吉球磨地方にはこうした危

幣殿上部の柱間には細密な彫刻が刻まれている。建物上部に、青、緑、赤で彩られた格狭間（こうざま）と呼ばれる模様があるのは、人吉球磨地方独特のもの

16世紀半ばにポルトガルから伝わったカード遊びが発展し、その後日本中で大流行した「ウンスンカルタ」の絵札。「うんともすんとも」の語源はこの遊びからきているという

1.本殿前、向かい合わせの龍柱は南九州の神社の特徴で、青井阿蘇神社のものはその先駆け　2.楼門の四方にある二対の鬼面。古い時代の名残で「人吉様式」と呼ばれる　3.彫金が施された錺（かざり）金具は社殿の広範囲で確認できる　4.大きく反り返った垂木など、楼門には鎌倉時代に大陸から持ち込まれた禅宗様が色濃いが、彩色や絵画、木彫や錺金具などの豊かな装飾は明らかに桃山様式だ

本殿（写真左）は、銅板葺きで正面側の屋根が長い三間社流造（さんけんしゃながれづくり）。幣殿と拝殿はともに寄棟造の茅葺き屋根だ

歴史的建造物誕生の秘密を探る！

機は訪れず、むしろ統治以前の文化風習は寛容に受け入れられた。青井阿蘇神社の社殿に古い時代の建築様式が見られるのも、熊本県内の指定文化財の3分の2が人吉球磨地方に集中しているのも、相良氏が地域の人々が大事にしていたものを奪わず保護してきたからにほかならない。

寛容さは庶民の遊びにも見られる。江戸時代に日本中で大流行した後、遊興禁止令で「ウンスンカルタ」という遊びが姿を消したが、藩主が黙認したため人吉球磨地方にだけ残り、今日まで遊び継がれている。このことから庶民の娯楽にも寛容だった相良の殿様の姿勢がうかがえる。

人吉球磨に伝わる先人を敬う気持ち

古くからの文化風習が大切に守られてきたなかで、九州では例のない桃山様式がいち早く取り入れられたことは画期的であった。中央から遠く離れた山里にどのようにして当時先端の建築技術が入り込んだのか、経緯や採択された理由は残念ながら不明だ。ただ、その頃は比較的世情が安定しており、経済的にも精神的にもあらためて神仏への感謝の念をもつ余裕があったことは推測できる。

社殿群は幸いなことに火事や自然災害に遭うこともなく、約400年の間に最低14回の修理が行われ現在に至る。その修理も、旧社殿の建築技法で行われ、部材も可能な限り再利用して変化は細部にとどめられた。「歴史の中で大きな波風が立たなかったということも、昔の姿が守られた大きな理由だと思います。特別裕福な地域ではなかったし、大成功を収めた人物が大がかりな修復をし、元の建物の形を変えてしまうようなこともなかった。先人たちが大事にしてきたものだから大切に扱うという心が藩主にも民にもあったのでしょう」（福川さん）

「青井さん」と呼ばれ親しまれてきた神社が国宝に指定されたことで、地域住民の意識は変わったと福川さんは言う。この青井阿蘇神社だけではなく、自分の家の周りの神社も大事にしようという気持ちが芽生えたようだ。人吉球磨地方に継承され、青井阿蘇神社を守ってきた「心」を垣間見た気がする。

ところかわれば

人吉編

この地でしか味わえない、その場所だから楽しめる情報をお届けします。

栗めし　味

人吉駅弁やまぐち

0966-22-5235

栗をかたどったかわいらしい容器のお弁当。フタを開けると、炊き込みご飯の上に大粒の栗がゴロゴロと5つ。ほっくりと甘く、塩味のきいたご飯との相性もぴったり。お煮しめや玉子焼きなどのお惣菜も作りが丁寧で、温もりを感じさせる。1965年に登場して以来、根強い人気を誇るこのお弁当、人吉駅の駅前店舗や駅売店で入手できるが、運がよければ、駅構内で立ち売りさんからも購入できる。これぞ駅弁、という醍醐味を味わいたいならぜひ！（1,100円・税込み）

焼酎もなか　買

寅家

0966-23-2432

香り豊かな球磨焼酎を使用した熊本県を代表する銘菓。一升瓶をかたどったひと口サイズの可愛いもなかの中には、球磨焼酎が練り込まれたすっきり甘い自家製の餡が詰まっている。一口ほおばると焼酎の芳醇な風味が広がり、心地良く鼻に抜けていく。包み紙にはいろいろな銘柄の球磨焼酎のラベルがデザインされているが、中の味は白餡と黒砂糖餡の2種類。お酒好きな人への熊本土産として最適な一品だ。（12個入り648円・税込み）

ウンスンカルタ体験　訪

立山商店

0966-22-2566

特集本編にも登場したウンスンカルタ。遊び方はカルタというよりはトランプに近い。4人対4人のチームに別れ、1枚ずつ札を出していき、一番強い札を出した人が8枚の札を1束にして取り、この束が多いチームが勝ちとなる。手札や相手が出した札から、読みと勘を働かせるゲーム展開が魅力。初心者でも丁寧に指導してくれるので、ぜひ挑戦してみてはいかがだろう。（1名1時間300円、5名以上 ※要予約）

ハイキャブ仕様に加え、アタッチメントにリフティングマグネットを装備したBM800Gは、港湾荷役現場における鉄スクラップの運搬に最適化されている

貨物を迅速かつ確実にお届けします!

コベルコ現場最前線
REPORT

現場の声から生まれたハイキャブ仕様クレーンが港湾荷役の作業性を向上

ハイキャブ仕様クローラクレーンBM800G

山田高弘＝取材・文　関根則夫＝撮影
text by Takahiro Yamada／photographs by Norio Sekine

東海埠頭株式会社は、静岡県の中央部、駿河湾に面する清水港の港湾荷役を手がける企業だ。同社では2016年、20年以上にわたり貨物の積み降ろし作業に使用していた他社機に代えて、コベルコのクローラクレーンBM800Gを導入。現場での作業効率を高めるために、オペレータの意見をきめ細かく反映させたハイキャブ仕様のカスタマイズを施した。

現場への最適化を目指しコベルコのクレーンを初導入

東海埠頭は、200年を超える歴史を持つ鈴与グループの一員として1973年に設立された。この鈴与グループは、初代鈴木与平氏が清水港で創業した物流業「廻船問屋 播磨屋与平」をルーツにしている。取締役の千葉和史さんは、次のように話す。

「現在、鈴与グループは、静岡を基点に国内外をカバーする物流、エネルギー販売をはじめとする商流、さらには建設、ビルメンテナンス、警備、食品、情報、航空、地域開発・その他サービス分野にいたるまで、約140社のグループ企業が幅広い事業を展開しています。そのなかで、創業の地である清水港の袖師第一埠頭にて船舶貨物の積み降ろしなどの港湾荷役作業を手がけるのが、当社の業務です」

東海埠頭では、これまでに合板、製材、アルミ、チップ、自動車、コンテナ、穀類、冷凍魚など、多岐にわたる貨物を扱ってきたが、近年は、県内各地の工場や建設現場から出る鉄スクラップの取扱量が増えているという。トラックで運ばれてくるそれらを、荷台から降ろして船へと積み込む役割を担っているのが、コベルコのクローラクレーンBM800Gだ。

「16年9月、今まで使用していた他メーカ機との入れ替えで導入したBM800Gは、当社初のコベルコ製クレーンです。鈴与グループ全体を見ても、これまでコベルコ製クレーンの導入実績はありませんが、こちらからの要望にきめ細かく応えてくれる対応力が決め手となり、導入を決定しました」（千葉さん）

こだわりのカスタマイズで完成度の高い仕上がりへ

港湾荷役作業における現場責任者の三輪照夫さんによると、新しいクレーンの導入にあたっては、現場での使いやすさを求める、数多くのリクエストがあったという。

その1つがハイキャブ仕様にすること。オペレータがトラックや船舶の荷台を見下ろしつつ操作できるハイキャブは、積み降ろし作業の効率や安全面において必須の条件だった。フロントアタッチメントにリフティングマグネットを装備すること、さらにその際、機体に載せる発電機が旋回の妨げにならないよう、従来よりもコンパクト化することも要望したという。

そのほかにも、旋回を繰り返すことが多い積み降ろし作業ゆえ、ワイヤが脱索しないようにシーブの枚数を減らして溝の角度を広角にすること。ワイヤが跳ねて機械を傷めないようにする工夫などを要望。これらの多様なカスタマイズのオーダーに対して、コベルコのスタッフは丁寧に検討し、実現してくれたと三輪さんは振り返る。

「ハイキャブ仕様に関しては、フルパワー時にキャブの揺れもなく、完璧な仕上がりです。また、充分なパワーの維持と、発電機のコンパクト化を両立したリフティングマグネットは、私たちの期待以上の成果を上げてくれました。メーカを変えたにも関わらず、現場のオペレータから使いにくいという声は一切なし。作業効率は大幅に向上しましたね」（三輪さん）

東海埠頭が導入したコベルコのハイキャブ機は、すでに鈴与グループ内でも評判は上々。同社と同じように、清水港の各埠頭で港湾荷役業を営むグループ企業からの問い合わせも届いているという。本州の真ん中に位置するこの港から日本全国の港へ。高い完成度と柔軟な対応力で、コベルコのハイキャブ機が港湾業界を席巻する日も近いだろう。

取締役
千葉和史さん

港運部部長
三輪照夫さん

今回の訪問先は

東海埠頭株式会社

所在地／静岡県静岡市清水区横砂408-13
✆054-364-1872
創業／1973年
事業内容／港湾荷役事業、防除業、船舶代理店業、冷凍貨物取扱事業、港湾運送関連事業、計量証明事業
従業員数／226名

リフティングマグネットを装備し、パワフルに運搬作業をこなすBM800G

1.キャブからの下方視界を確保するためメッシュ状にした足場。キャブへと昇降しやすいよう、階段の角度と幅にもこだわって設計されている　2.マグネット用の操作レバーは、乗降時の妨げにならないよう可動する　3.4.キャブのアイポイントは5.8m。船の荷台の底近くまで見渡しながらの作業が可能だ

オペレータの平野勝美さん。「旋回時はもちろん、走行時も振動を感じません。椅子の座り心地が良いので疲れにくく、乗っていてとても楽ですね」

コベルコ現場最前線
REPORT

コストも人手も時間も省く情報化施工の本格展開にコベルコのショベルが貢献

3Dマシンガイダンス&チルトローテータ搭載SK135SRD

山田高弘＝取材・文　三浦泰章＝撮影
text by Takahiro Yamada／photographs by Yasuaki Miura

ホルナビ

3Dマシンガイダンスを搭載したSK135SRD。アタッチメントとしてチルトローテータを採用し、情報化施工の効率性を最大限に生かす組み合わせを実現

岡山県に本社を構える春名産業株式会社は、東日本大震災の発生以降、東北地方の復興事業に携わっている土木業者だ。保有する油圧ショベルにはすべて、コベルコのマシンガイダンスシステム「ホルナビ」を搭載。情報化施工を積極的に導入することで作業の効率化を図り、ニッポンの土木業の未来をいち早く体現している。

今回の訪問先は
春名産業株式会社
所在地／（本社）岡山県津山市林田200-5
（仙台事務所）宮城県仙台市宮城野区蒲生字南城道田5-159
アベパークビレッジ6号室
（本社）0868-23-1079
創業／1970年
事業内容／農業土木、道路建設
従業員数／4名

ICT建機の導入で作業の効率化を徹底追求

春名産業の工事部部長、春名英俊さんが、長年勤めた農業土木会社を退職し、休業していた実家の会社を再開させたのは2012年。前年に発生した東日本大震災の復興事業に貢献したいとの想いからだった。しかし、当初は熟練のオペレータや作業員の数が少なく、とにかく人手不足に悩まされたという。

そこで春名さんは、作業を徹底的に効率化させるという策を講じた。そのツールに選ばれたのがコベルコ機。「ホルナビ3Dマシンガイダンス」と、欧州ではよく使われているアタッチメント「チルトローテータ」を搭載したSK135SRDだった。この2つの組み合わせは日本初の試み。春名さん自らコベルコに提案して実現させた。

「バケット位置や掘削した深さがディスプレー表示される3Dマシンガイダンスなら、オペレータが機械から降りなくてもそれらを確認できます。施工中の誘導に関わる人員を削減できるうえ、作業時間も短縮。さらに、3Dデータで法面（のりめん）の切り出し位置を図面通り正確に特定でき、丁張り作業も不要になります」（春名さん）

法面の仕上げには技術が必要なので、オペレータの習熟度によって仕上がりに差が生じる。一方、チルトローテータはバケットを180度回転させて、下から上へ土をかき上げることが可能。そのため、オペレータの習熟度にかかわらず、精度の高い法面仕上げが行える。ショベルが法面と正対していなくても、機体を動かさずにバケット角度を変えるだけで作業を進められるので、作業時間の短縮につながる。

16年12月、同社はこのSK135SRDを常磐自動車道のスマートインターチェンジ工事に導入した。ここでは、「ホルナビ2Dマシンガイダンス」搭載のコベルコ機も2台稼働。まず、3Dマシンガイダンス搭載機が設計図面の3Dデータに基づき切り出し位置を決め、それに従い2Dマシンガイダンス搭載機が法面仕上げをするという手順で作業が行われた。

「設計データのない2Dマシンガイダンス搭載機でも切り出し位置と勾配さえ分かれば丁張りなしで正確に施工が可能。すべての機械に3Dマシンガイダンスを搭載しなくても、役割ごとに機械を使い分けてコストを抑えつつ、作業の効率化が図れました」（春名さん）

実際、本現場では通常の施工と比較して、約2週間の工期短縮を実現している。

低燃費のコベルコ機をコスト削減の切り札に

3Dデータ活用による生産性の向上は、16年度から国土交通省が取り組みを開始した「i-Construction」が示すように、今や国策である。そのため、マシンガイダンスシステムの技術開発は、各重機メーカがこぞって注力している。そんななかで、春名産業がコベルコを選択したのはなぜなのか。春名さんはこう語る。

工事部部長
春名英俊さん

「東北の復興事業に着手した当初、コベルコ製のレンタル機を使っていましたが、同じクラスの他社機よりも2割程度、燃費の良さを感じていました。低燃費のコベルコ機に、3Dマシンガイダンスとチルトローテータを組み合わせれば、人員や作業時間はもとより、燃料費も低減させられる。あらゆる面での効率化ができると考えたのです」

2025年には建設業就業者が現在の約半分になるという予測もあり、情報化施工の重要度はより高くなるだろう。春名産業では17年に入り、3Dマシンガイダンス搭載のSK135SRDをさらに1台導入した。大きな変化の最中にある土木業界において、同社は情報化施工を武器に、さらなる生産性向上の加速を目指す。

こちらのQRコードから動画をご覧いただけます

常磐自動車道のスマートインターチェンジ工事の作業風景。3Dマシンガイダンス搭載のSK135SRDが付けた頭切りの位置に従い、2Dマシンガイダンス搭載のショベルで法面の追っかけ施工を行っている

1.バケットの反転や微細な角度調節が可能なチルトローテータは、アタッチメントの交換もスピーディー。運転席に座ったまま、秒単位で取り換えられる　2.チルトローテータにオプションで付けられる「カニヅメ」を使えば、瓦礫なども簡単につかめる　3.「カニヅメ」を使い、杭抜き作業に従事するSK135SRD

4.チルトローテータはゲームのコントローラー感覚で簡単に操作できる　5.オペレータの佐藤清志さんは、掘削する深さや法面の角度も設定できるマシンガイダンスシステムを絶賛。フル稼働しても丸2日は保つコベルコ機の燃費性能も高く評価する

キャブ内のディスプレーに3D設計データと現在のショベルのバケット刃先位置を表示。作業の進捗状況を、運転席からリアルタイムで確認できる

経済ジャーナリスト
和上 陽子
東京外国語大学卒業後、日本経済新聞社に入社。日経ホーム出版社（現在の日経ＢＰ社）月刊誌「日経マネー」の編集を経て、退社。独立後は、経済・金融の各種専門誌などに寄稿するなど、経済ジャーナリストとして活躍中

クイズを解けば“いま”が分かる
この記事に注目！

近頃気になる日経BP媒体の記事をピックアップ。
その報道の背景にある「時代性」を探るコーナーです。
まずはクイズに挑戦！ 答えは解説文中にあります。
楽しみながら“現代を知るヒント”を探してみませんか？

Q1.

国土交通省が2017年度から試行するICT活用の工事分野は？

a. 森林工事　*b.* 山岳工事　*c.* 河川工事　*d.* 港湾工事

建設現場のICT導入の舞台いよいよ「陸」から「海」へ

建設業界のキーワードとして近年注目されているＩＣＴ（Information and Communication Technology＝情報通信技術）。これは、調査・設計から施工、修繕にいたる一連の流れをより合理的にするための取り組みだ。

これまでＧＮＳＳ（全球測位衛星システム）やＴＳ（トータルステーション）、３次元ＣＡＤ、ドローンなどを活用したＩＣＴ導入を主として土木工事分野では進められてきたが、その動きが、いよいよ「陸」から「海」へと広がりそうなのである。

「国土交通省は12月1日、ＩＣＴを活用した浚渫（しゅんせつ）工事を2017年度から試行する方針を示した」（日経コンストラクション2016年12月26日号より）。「土木工事で先行した生産性向上の取り組み『i-Construction』を、港湾工事にも展開していく」（同）という。

国交省は16年6月に専門委員会を立ち上げ、港湾工事でのＩＣＴ導入基準の整備や標準化の議論を開始。同年12月には、３次元データの活用を基本とする測量・設計・施工・検査、それぞれの技術基準も整備し素案を示した。

その新基準の1つが「マルチビームを用いた深浅測量マニュアル」だ。従来、浚渫工事の測量ではシングルビームを使って水深図などの2次元図面を作成するのが一般的だったが、マルチすなわち複数のビームを利用して3次元測量を行えば、測量から維持・管理まで一連のプロセスでデータ活用ができる。

素案では、マルチビームを使った測量やデータ処理方法についての基準を示している。さらにはマルチビームの使用料を反映した積算基準も作成。3次元データを使った度量計算による出来形管理や監督・検査基準も整備するという。17年度の試行は、比較的大規模な国交省直轄の浚渫工事の現場が対象だが、順次、防波堤などの構造物の工事や維持管理などについても基準が検討される見通しだ。つまり港湾に関わるあらゆる工種でＩＣＴ導入が進んでいくことになる。

人手不足や予算の縮小など厳しい現実に直面している建設業界。これを乗り越えるだけの生産性向上を目指す切り札がＩＣＴだと言えるだろう。最新技術に目を配ると同時に、新たな流れに対応できる人材の育成にも力を注ぐ時機が来ている。

日経コンストラクション
2016年12月26日号

Q2.

文具・事務機器メーカのコクヨが提唱するオフィス整理術。「理想の机」のあり方はどれ？

a. スナックのレジ　*b.* すし屋のカウンター
c. コンビニの陳列棚　*d.* ハンバーガー店のキッチン

オフィスの整理……、理想の机は？「片付ける」の先に「整える」

まず正直に答えていただきたい。今、オフィスのあなたの机はどうなっているだろうか。「机上にはペン1つない」「マグカップとスマホさえ片付ければ完璧」。それとも、「今日のプレゼン資料が行方不明で捜索中……」か――。

文具・事務機器メーカのコクヨが提唱するオフィス回りの整理術『コクヨ式』によれば、これらはいずれも不合格だろう。

「仕事場の理想は『すし屋のカウンター』。寿司ネタや道具などが整然と置かれ、職人の所作にムダがない」（日経トレンディ2017年1月号より）。これは同社の主幹研究員、齋藤敦子氏の言葉だ。

なるほど、すし屋のカウンターにはいろいろなものが並んでいるが、どれも客のオーダーに応えてパッと手に取りサッと握って提供するためのものだけだ。「あのネタは冷蔵庫だっけ？」などとウロウロする職人はまずいない。

さて、『コクヨ式』の整理の極意は意外とシンプルだ。基本は引き出しの使い方。まず「1段目に文具」。ただし常に使う文具は机の上に出しておき、その次に使うものを1段目に入れる。必要以上には持たず必ず定位置へ収めるのが鉄則だ。そして「3段目にファイル」。フォルダやボックスなどを駆使してできるだけ小分けにし、よく使うものほど手前に置くのがコツだという。

日経トレンディ　2017年1月号

では2段目は――？

「2段目は自由に使うこと」（同）。何か入れなければと思う必要はなく、ノートPCの借り置き場や、好きな本、小物などを入れておく。自分の資料は入れずに同僚から回ってくる書類などを収める〝共有部〟にするのも手だ。

もう1つ、『コクヨ式』が提唱するのは、「自席は楽しくなければいけない」ということ。海外ドラマなどで職場の机に家族写真を飾っているシーンを見ると、〝公私混同〟だと思ってしまう人もいるだろうが、自宅よりもオフィスのデスクにいる時間のほうが長い人も多い。お気に入りの小物といった「仕事と無関係なものをあえて置く」ことで、片付けは楽しくなるのだ。

机が片付いているだけで、立派な仕事ができるわけではない。ただ、仕事を意識した机の整理は、オフィス全体の生産性アップにつながるかもしれない。

平戸孝之＝イラスト
Illustration by Takayuki Hirato

Wind 1 from
アメリカ
USA

世界三大建機展の1つ、「ConExpo-Con/Agg 2017」に出展！

2017年3月7～11日の5日間、アメリカのラスベガスで「ConExpo-Con/Agg 2017」が開催されました。3年ごとに行われ、世界各国から2,500社以上が出展、約13万人以上の来場者でにぎわう世界最大級の建設機械展示会。コベルコ建機の米国現地法人Kobelco Construction Machinery U.S.A.Inc.はCNHとの提携解消後、「Genuine KOBELCO」（純正コベルコ）として2度目のブース出展をしました。

ショベルとクレーンはそれぞれ屋内外にブースを設置。実機やシミュレータの展示をはじめ、さまざまなイベントでコベルコの最新機と技術をPRしました。会場には、北米に限らず世界中から多くのお客様や代理店の方々がご来場。日本からもたくさんのお客様にお越しいただき、ブースは連日大盛況。家族連れのお客様も多く、展示機の前や運転席に乗って記念撮影をするなど、コベルコブースは和気あいあいとした雰囲気に包まれていました。

また、各国のマスコミ関係者を集めたプレスイベントも開催。ショベル・クレーンの各新機種の紹介はもちろん、北米新工場をベースに、今後ますますアメリカ市場において成長を目指すことを宣言しました。

1.期間中にはお客様への譲渡式も実施
2.お子様にも楽しんでいただけました！

3.CK1100G-2、CK1600G-2、CK2750G-2の3モデルの実機を展示　4.操作体験が好評だったシミュレータキャブ

北米Gシリーズが立ち並んだクレーンブース

屋外の「Gold Lot」ゾーンに設置されたクレーンブース。ここでは北米Gシリーズから、日本での排出ガス2014年規制に相当する「Tier4 final」に対応した「110USトンづりCK1100G-2」、「160USトンづりCK1600G-2」、さらに「275USトンづりCK2750G-2」の3モデルを展示しました。

実機のほかにも、アメリカの現地法人が独自に制作したトレーニング用のシミュレータキャブを、前回から継続して展示。来場された方々には、実際のキャブに座り操作体験をしていただきました。期間中は天候にも恵まれ、世界各国の方にコベルコのクレーンをPRできました。

1.多くの来場者でにぎわうコベルコのショベルブース　2.測量機器メーカのTrimble社とタイアップした3D情報化施工機器搭載のSK300LCの展示

6.展示会特別仕様ラッピングのSK210LC-10は、北米新工場での組み立て第1号機

3.SK210Dは、自動車解体の臨場感を伝える斬新な方法で展示　4.展示された新型ハイブリッド機のSK210HLC-10　5.各国のマスコミを集めたプレスイベントの様子

世界に誇る最新技術を結集したショベルブース

屋内のショベルブースは、星条旗をモチーフにして装飾。“BUILT LIKE NO OTHER”をコンセプトに、他社にはないコベルコ独自の製品・最新技術を訴求しました。ブースでは、SK350LCなどの10型ショベルを筆頭に、SRシリーズやミニショベル、解体機など幅広いラインアップの計21台を展示。なかでも注目を集めたのが、特別仕様にラッピングされたSK210LC-10と、本物の自動車と組み合わせた斬新な方法で展示された自動車解体機SK210D。同機の前では、多くの方が記念撮影をしていました。

また、3D情報化施工機器を搭載したSK300LCの実機展示とシミュレータで、情報化施工への対応力をアピール。さらに、幅広いディーラネットワークを活かしたアメリカにおける強固なサポート体制もPRし、「アメリカに根付いた歴史ある企業である」というメッセージを発信しました。

そのほかにも、ゲームコーナーやグッズ販売など家族で楽しめるアトラクションを用意。コベルコが誇る最新技術を目の当たりにできるコベルコブースは、主要建機メーカが並ぶ「North Hall」でも抜群の存在感を放ち、3万8000人以上の来場者数を記録しました。

［コベルコの風］

日本全国、そして世界各国でのコベルコの活動をリポート！

Wind 2 from
福岡
Fukuoka

西日本コベルコ建機小倉工場で、春の大展示会開催決定！

西日本コベルコ建機小倉工場にて、5月に春の大展示会が開催されます。最新のホルナビ搭載機、ハイブリッド機、eマグ搭載機をはじめとした多数の実機展示やデモンストレーションなど、見応えのある企画をご用意しています。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

［開催概要］
日時：2017年5月20日（土）10:00～17:00
21日（日）9:00～16:00
会場：西日本コベルコ建機（株）小倉工場
福岡県北九州市小倉北区西港町89-5
093-591-3751